

演劇鑑賞会の歴史と劇団との関係について

日本は現在、アベノミクスとやらで景気回復と言われていますが、庶民にはなかなか実感がありません。それどころか、物価上昇や消費税値上げなど、ますます演劇を観続ける環境が厳しくなっています。しかし、どんな時代でも(演劇)文化の灯は消える事はありませんでした。

今から約120年前のフランスで、商業主義を排して芸術性を追求した演劇運動、「自由劇場」が誕生しました。その運動は世界中に広がり、イプセンの『人形の家』、トルストイの『復活』、ゴーリキーの『どん底』、チェーホフの『桜の園』などの名作を生み出しました。そしてこの流れが日本に届いたのがちょうど百年前の1909年。島村抱月、坪内逍遙らによって「文芸協会」、小山内薫、市川左團次らが「自由劇場」を設立し、1911年に帝国劇場において、文芸協会によって松井須磨子主演による『人形の家』が上演されたのです。

この歌舞伎でもない、新派劇(書生芝居の流れ)でもない演劇を、朝日新聞が劇評にて“新劇”と名付けました。そして、1924年に小山内薫、土方与志が「築地小劇場」を開設したことから、日本の新劇運動が始まりました。が、せっかく芽生え始めたこの新劇運動も、残念ながら戦争のためにその灯が消えそうになります…。

しかし戦後、新劇俳優たちはこの運動の再興に取り組み、まずは観客づくりから始めました。その過程の中で生まれたのが私たち「演劇鑑賞会」であり、そして会員の立場から新劇運動を支えるという、世界で類を見ない演劇鑑賞運動の始まりでもありました。

百年前の未曾有の危機の中でも、日本では演劇を創り続け、それを観続けた人たちが確かにいたのです。いま私たちがその危機にあるのならば、それを乗り越えていくために、今こそ劇団としっかりと手を携えていく必要があります。

そのために、マスコミなどの派手な宣伝活動による営利目的の商業演劇や芸能プロダクションが作る演劇とは一線を画し、商業資本に頼らず、人間の生きる素晴らしさを描き、芸術性を追求する非営利の新劇の精神を受け継ぐ劇団が作り出す演劇を、私たち非営利の演劇鑑賞が会員を広げて上演の場(例会)を作り、回数(年間の本数やステージ数)を増やすことが、劇団を経済的に支えることとなります。

一方、私たちはそうした劇団が作り出す舞台から、さまざま感動や勇気や励ましを貰うことによって、日々の生活に潤いをもたらし、豊かな人間性を育みながら、会を運営する原動力が生まれてきます。つまり私たちもまた劇団によって支えられているのです。



築地小劇場

現在の全国演鑑連の状況報告

現在の神奈川ブロックの状況報告

厚木えんかんの歴史について

厚木演劇鑑賞会は「厚木で自分たちの観たい演劇を定期的に観劇しよう。」という声が集まって1986年4月に、わずか483名の会員で発足しました。

厚木が出来るきっかけとなったのは、全国では久しく新しい鑑賞会が生まれていなかった中で、1985年に横浜演鑑の支援の元で町田に鑑賞会が誕生したことにありました。小田急線沿線で初めての鑑賞会という事もあり、会員は町田市民にとどまらず厚木、海老名といった沿線住民も広く会員となっていました。

町田が発足するにあたり、横浜演鑑を始めとする全国の鑑賞会で、その長い歴史の中で紆余曲折を経ながら作りあげられた、「会員制」「サークル制」「運営参加」という鑑賞運動の3つの柱を取り入れました。

こうして、チケットを買って観劇するのではなく、会費を納めて自らも運営に参加する会員として観劇を始めていく中で、「私たちの街にも演劇ができる会館があるのだから、鑑賞会が作れないだろうか」という声が高まって、翌年86年に町田から根分けの形で、厚木と川崎市麻生に2つの鑑賞会ができました。そして87年には、厚木から海老名が、町田・麻生から多摩ニュータウンが再び根分けの形で2つの鑑賞会ができたのでした。こうした誕生の経緯から、当時準備会だった相模原を含めた5つの鑑賞会で、88年に5団体の財政を一本化した、小田急沿線連絡会議を結成しました。

その中で、厚木では88年9月、1070名の会員数で昼夜2ステージ公演を開始し、1179名の過去最高会員数となりましたが、財政的に厳しく、89年2月には夜1ステージに戻しました。しかし昼公演への要望が高く、同年9月に2ステージを再開しましたが、やはり会員増ができずに、91年2月には再び1ステージに戻すという迷走を続けていました。この間、90年2月には地域の独自性を尊重し、小田急沿線連絡会議を発展的に解消し、財政的にも再び独立採算となりました。

92年からは観劇会数を年5回に減らして財政再建を図りながら、94年に年6回に戻りました。その後会員数は一進一退を繰り返しながらも徐々に会員数を減らしていき、とうとう800名を割ってしまいました。こうした危機感から、98年に新しい観劇システムを提案し、会の活性化を図ったのでした。これが「会費の口座自動引落とし」「運営基金制度」「家族会員制度」「観劇振替制度」になります。このシステムを導入した結果、退会数は半減したものの、入会数がそれを上回ることができず、800名台への回復ができませんでした。そして02年から再び観劇会を年5回に減らしたものの、会員数は700名台まで落ち込みました。

さてこの時期、厚木だけが低迷していたかと言うとそうではありませんでした。神奈川の仲間も軒並み低迷しており、全国を見回すと、九州以外のブロックも同じ状況でした。そこで、神奈川も九州の活動を真摯に学びながら、02年10月の神奈川演鑑連第8回総会にて、「ブロックに結集し、ブロック全体で発展していく」との方針を掲げると共に3つの共通課題に取り組むことを決議しました。

こうして、会の運営は、運営サークル活動を最重点にし、運営担当では、「サークルで1名会員を増やす」=〈サークルクリア〉の活動を中心にしました。しかし、2005年を境に、再び会員減少が始まり、会員数も600名台になってしまいました。

そこで、2009年6月例会からの、運営サークル活動では、何故「運営サークルなのか」「会員を増やすのか」といった疑問を、演劇鑑賞会の歴史、劇団との歴史をしっかりと知った上で理解し、厚木えんかんの理念のもとに立って、運営サークルが一つのチームとなって、〈サークルクリア〉という目標に向かって取り組んでいく活動に変わっていきました。

1. 演劇鑑賞会は会員が会費を持ち寄って運営する会で、会員は観客であると同時に主催者です。サークルは、1年に1回、運営サークルとして例会運営に参加し、力を寄せ合い次の課題に取り組む活動を深めていきます。

運営サークルを従来より一層活発な活動にしていきます。運営サークルとは演劇鑑賞会の基本理念の確認の場であると同時に、活動方針の実践の場です。そのために、運営サークルの時には、サークル内の連絡を密にし、各会合にはできるだけ複数で出席し、会合で決まった事は、必ずサークル全員で共有するようにします。

担当例会では、全サークルで、サークルの仲間と話しかけて、どうやって新しい会員を迎えるか話し合います。

また、劇団(創造団体)に敬意を払い、例会を最高の状態で共に作り出すために、前例会の会員数より1名以上の会員増で劇団を迎える「前例会クリア」をめざします。

2. 演劇鑑賞会の基礎は会員制、サークル制です。サークル内のコミュニケーションを深め、例会を見続けていく力としていきましょう。

演劇鑑賞会は、日常の生活の中で、様々な演劇と出会う喜びを体感するために会員制となっています。また、会費を持ち寄り、その中から劇団(創造団体)へ上演料としてお渡しすることで、劇団の次なる作品創りに寄与する事となります。

会員を増やすことは、劇団への創造活動に大きな力となることを再確認します。

演劇鑑賞会の基礎単位はサークル(会員3名以上)です。

サークルは例会を見続ける力となります。サークル会員どうしでの例会感想交流は演劇への興味を深めていきます。また運営サークルの時には、会員の拡大方法や会合への参加者や例会当日の役割分担など、サークル内で話し合うことができます。

こうしたサークルの魅力を最大限に発揮できる会をめざします。

未サークル(会員2名以下)はあくまでサークルに戻るための一時的な状態です。

まずはサークル化をめざし、サークルへの編入、未サークルの合併などもすすめていきながら、未サークルをなくし100%サークルをめざします。

3. 全国演鑑連(全国演劇鑑賞団体連絡会議)と、神奈川ブロック(神奈川演劇鑑賞団体連絡会)の活動方針に向き合い、演劇鑑賞運動の発展をめざします。

全国演鑑連では、「ブロックに結集し、ブロックで発展する」事を方針に掲げています。神奈川ブロックの理念の実現に向けて、可能な限り協力していきます。

神奈川ブロックから指摘されている課題、「会費引き落とし制度」「振替券制度」について、サークル懇談会や運営サークルの場で話し合っていきます。

神奈川ブロックでは、年間レパトリーを年6作品提案しています。厚木えんかんも神奈川ブロックの年間レパトリー6作品を厚木会場で実現することを目標とし、運営サークル活動を中心にすえて、会員数の回復をめざします。

(参考) 2013年度・予算について

2014年度の予算は3月総会で決定します。

【収入の部】

2013年1月1日～2013年12月31日(単位:円)

科目名	決算額	予算額	増減比較	一般会計	観劇会会計
会費・一般	10,214,600	10,051,200	163,400	4,020,480	6,030,720
会費・家族	5,524,000	5,352,000	172,000	2,140,800	3,211,200
会費・大学・障がい者	79,200	144,000	64,800	57,600	86,400
入会金	122,500	120,000	2,500	48,000	72,000
雑収入	46,109	45,000	1,109	18,000	27,000
郵送手数料	548,780	540,000	8,780	216,000	324,000
寄付運営基金	54,000	30,000	24,000	12,000	18,000
収入合計	16,589,189	16,282,200	306,989	6,512,880	9,769,320

(2013年度予算年平均会員数 / 582名 ・一般 / 349名・家族 / 223名・大学・障がい者 / 10名)

(2012年度決算年平均会員数 / 589名 ・一般 / 354名・家族 / 230名・大学・障がい者 / 5名)

【支出の部】

科目名	決算額	予算額	増減比較	一般会計	観劇会会計
上演料	5,718,720	6,095,316	376,596	0	6,095,316
会場費	890,317	889,027	1,290	0	889,027
食事宿泊費	370,224	290,966	79,258	0	290,966
観劇会経費	48,579	50,000	1,421	0	50,000
会報費	34,965	35,000	35	0	35,000
宣伝費	204,912	200,000	4,912	0	200,000
(舞台費小計)	7,267,717	7,560,309	292,592	0	7,560,309
給与	4,080,000	4,080,000	0	2,040,000	2,040,000
法定福利費	628,826	606,000	22,826	303,000	303,000
退職金積立金	230,000	120,000	110,000	60,000	60,000
旅費交通費	180,000	180,000	0	90,000	90,000
通信費	576,648	550,000	26,648	275,000	275,000
渉外費	29,970	10,000	19,970	5,000	5,000
水道光熱費	90,419	90,000	419	45,000	45,000
事務用品費	220,709	150,000	70,709	75,000	75,000
消耗品費	0	1,000	1,000	500	500
資料費	0	1,000	1,000	500	500
支払手数料	27,590	27,000	590	13,500	13,500
加盟費	144,000	144,000	0	72,000	72,000
リース料	527,625	497,700	29,925	248,850	248,850
家賃	1,386,500	1,336,500	50,000	668,250	668,250
印刷費	83,770	32,550	51,220	16,275	16,275
研修活動費	62,390	50,000	12,390	50,000	0
総会関係費	61,380	60,000	1,380	60,000	0
租税公課	0	1,000	1,000	500	500
雑費	0	1,000	1,000	500	500
引落手数料	131,685	131,000	685	52,400	78,600
予備費	0	1,000	1,000	0	0
消費税	177,800	0	177,800	0	0
(一般費小計)	8,639,312	8,069,750	569,562	4,076,275	3,992,475
支出合計	15,907,029	15,630,059	276,970	4,076,275	11,552,784
当期収支差益	682,160	652,141	30,019	2,436,605	1,783,464

